デジタルアーカイブ環境下での図書館機能の再定置

日本図書館情報学会第67回（2019年度）研究大会
シンポジウム デジタルアーカイブと図書館
2019年10月20日
龍谷大学大宮学舎

福島幸宏

東京大学 大学院情報学環 特任准教授

fukusima-y@iii.u-tokyo.ac.jp
https://researchmap.jp/fukusima-y/

自己紹介

- もともと日本近現代史を専攻
  - 高知県出身・島根大学・京都府立大学大学院・大阪市立大学大学院
  - 神社史、地域社会に関心／自治体史調査・フィールドの調査を経験

- 京都府職員時代
  - 京都府立総合資料館 2005年4月～2015年3月
  - 京都府立図書館 2015年4月～2019年3月

- その間に関わったこと
  - 京都府行政文書（重要文化財）の管理運用 → 20世紀以降の紙資料で初の重文指定
  - 戦時期・戦後の行政文書の公開 → 京都の戦時期／占領期研究の進展
  - 文化庁 指定文化財（美術工芸品）企画・展示セミナー修了 → 指定文化財の展示要件を構成
  - 「京都市明細図」の公開 → 京都の街歩きに多く活用
  - 「東寺百合文書（国宝）」のweb公開 → CC BYで公開／Library of the Year 2014大賞受賞／世界記憶遺産に
  - 京都府立図書館サービス計画策定 → 常に新しい取組を行うことを宣言／評価基準を検討
  - 都道府県図書館の横断検索システムへの超高速化 → カーリルのシステムを導入
  - デジタルアーカイブの連携に関する関係省庁等連絡会・実務者協議会
メタデータのオープン化等検討ワーキンググループ構成員 → ジャパンサーチへ
  - 京都府立図書館貴重書コレクションの構築 → ごく小規模ながら IIIF+DOI+CC0 の組み合わせで構築

- 現在
  - 東京大学 大学院情報学環 特任准教授
  - デジタルアーカイブについてMLAから幅広に考えていく立場／「大同団結」がスローガン

0.報告の構成

1 報告の射程

1-1 デジタルアーカイブ／電子リソース

1-2 報告のねらい

2 前提とする社会状況

2-1 図書館の“拡大”を支えた社会状況の変化

2-2 メガコンペティションのなかで

3 図書館機能の再定置

3-1 社会を平準化する存在として

3-2 サービス対象の限定

3-3 リソースの再配分を

4 2030年のライブラリー像

4-1 図書館機能の再定置の試案

4-2 いくつかの留保

Ⅰ 報告の射程

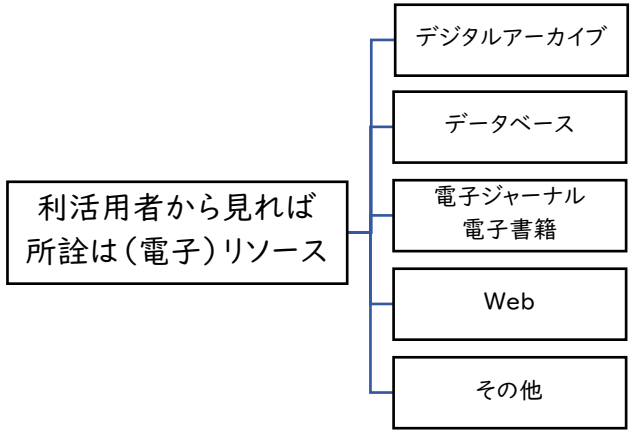
1-1.デジタルアーカイブ／電子リソース

- 現在のいくつかの定義
  - 様々なデジタル情報資源を収集・保存・提供する仕組みの総体（デジタルアーカイブジャパン実務者検討委員会2018）
  - 記録や記憶が集積している場所（吉見2017）
  - 有形・無形の文化財をデジタル情報として記録し、劣化なく永久保存するとともに、ネットワークなどを用いて提供すること。最初からデジタル情報として生産された文化財も対象となる（図書館情報学用語辞典第4版. 2013）
  - コンピュータ技術を基盤とした永続的な価値のある資料であり、将来の世代のために維持されるべきもの（UNESCO. “Concept of Digital Heritage”.2012）

- 報告者による暫定的な定義
  - 社会が遺すことを選択した／すべき知識情報基盤としてのデジタルデータとそれにまつわる仕組みの総体。真正性や永続性の確保、万人へのアクセス保障がその要件となる

1-2.報告のねらい

- 関係者の様々な用語／利用者側からの問題の再構成



- 「図書館に選択の余地はなく、力を合わせて共通のデジタル基盤を築いていくほかない」（ポールフリー2016）
- （情報機器を十分に使いこなせない、また使いこなす意思のない）「人々のニーズに合わせて図書館運営するのは正しい」（が、このままでは）「利用者サービスをICTとあまり関わらない非常に狭い範囲に限定したまま、今後に向けた展開の余地があまりないものに留めてしまうことになりかねない。これでは公共図書館の将来は危うい」（田村俊作執筆　植村・柳2017）

- 公立・学校図書館に焦点を当てて「デジタルアーカイブ環境下の“図書館機能”の再定置」を議論
  - ジャパンサーチの発展が前提
  - 大学図書館の動向が大きな参照系に
  - フレームワークの議論

２　前提とする社会状況

2-1.図書館の“拡大”を支えた社会状況の変化

- 社会構造の変化
  - 900あまりの自治体の消滅・地方の無人化と都市の高齢化（増田2014）
  - 「撤退（積極的な撤退）は、長い時間軸でみれば、体力を温存するための一時的な後退」（林・齋藤2010）
  - 歴史的連続性のシンボルの発見・創造／名称と位置情報の重要性（小山2015）
  - 日本社会の「慣習の束」とその不可逆の変化を指摘（小熊2019）
  - 今後は“縮小社会”を前提に：これまでは経済成長を背景に仕組みを拡充→文化資源の意味は今後ますます重要に／ただし社会の余剰はない

- 資料認識の深化
  - マンガ・動画資料：映画／テレビ／動画
  - 空間自体の情報化：建築／地域／地球／宇宙空間
  - 人間の情報行動

- 災害の多発
  - 阪神淡路大震災・東日本大震災の衝撃：地域自体の消滅を改めて経験／復興過程における博物館等資料の重要性の指摘
  - 「平常時の課題」の指摘は阪神淡路大震災の直後から：自治体史収録資料でも流出・消滅の危機にある

- 地域情報のプールの消滅＋対象の認識の拡大＋棄損の危機の再認識 → ？

2-2.メガコンペティションのなかで

- 教育格差の現状
  - 情報教育、英語教育の本格化
  - 私立学校や重点公立学校と通常の教育課程の格差増大
- 雇用の流動とリカレント教育の重要性の再確認
  - まずは訓練者側にリーチすることが重要か
- データ管理の重要性とコストの増大
  - 現場での行政情報の管理が破綻していることは明白
- MLAのなかで余力があるのはどこか？
  - MとAの状況は？（福島2011）
  - 「博物館に収蔵されているものは物質ではなく情報である」（梅棹忠夫1987）
- 社会に“可能性”を提示することが公的セクター全体の役割に

３ 図書館機能の再定置

3-1.社会を平準化する存在として

- 情報提供の側面から格差を埋めるための機能
  - 嶋田による理論と実践の往復（嶋田2019）

- まずは公的な情報へのアクセスの機会均等
  - 社会がいままで生み出してきたものの継承
  - 今行われている活動・投資の効率化
  - このために貢献するのがデジタルアーカイブの存在意義

- 同時に私的領域にある情報の公共財化
  - 「文化資源」（「ある時代の社会と文化を知るための手がかりとなる貴重な資料の総体」文化資源学会2002「文化資源学会設立趣意書」）全体の取り扱いを前提に
  - デジタルアーカイブを日常的に構築・維持できる準備

- 情報へのタッチポイントに特化
  - 必要な情報を必要としている場所に届ける、という社会成立の大きな要件をデジタル環境下で／利用して、行う

3-2.サービス対象の限定

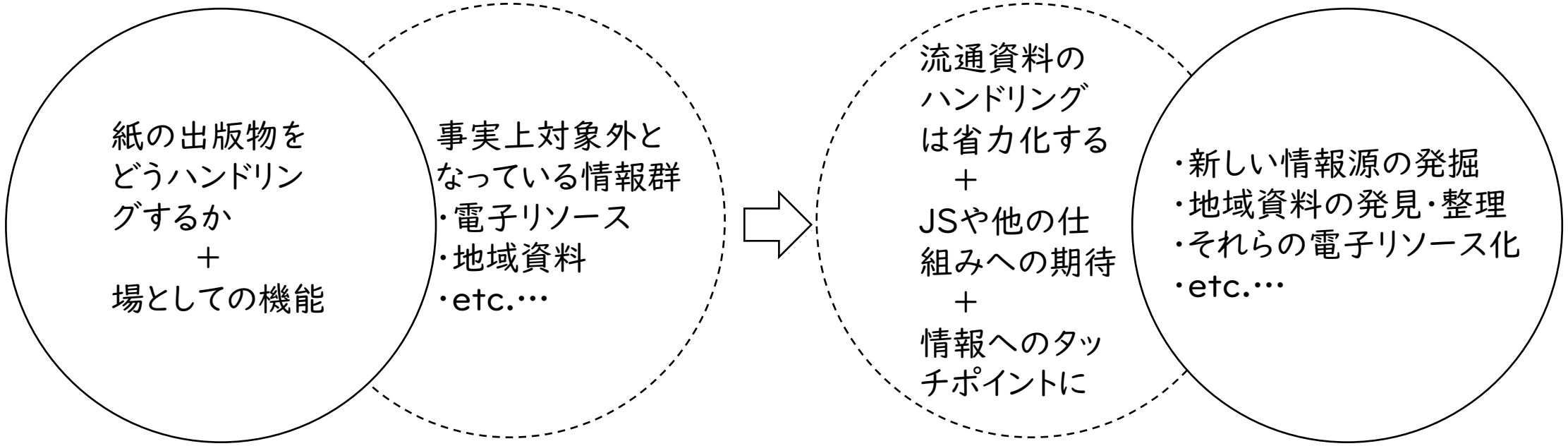
- 情報提供へのフォーカス
  - 図書館に割り当てられた限られたリソースをどう活用するか
  - 知識情報の提供に絞って構成する

- 眼前の利用者を適切な場へ誘導する
  - 広場機能
  - 地域医療で解決すべき方々
  - 児童サービスの専門家

- 前提となる収集・整理の射程の更新
  - 電子リソースの効率的な提供
  - 地域情報の集約
  - 博物資料・アーカイブ資料の発掘

3-3.リソースの再配分を

- リソース移行のイメージ

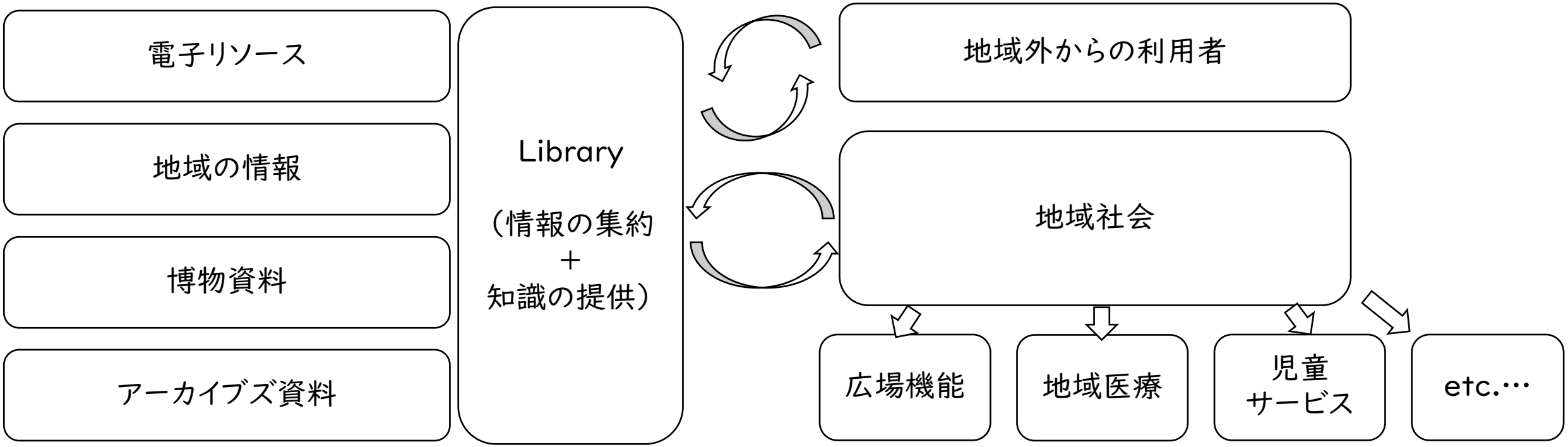


- 要点
  - 流通資料のハンドリングの省力化
  - “ここにしかない資料・情報”への注力
  - 電子コンテンツの不足や不便さに対して
    - 購買行動を変更することによる社会的プレッシャー
    - 顧客となることによる働きかけ

４ 2030年のライブラリー像

4-1.図書館機能の再定置の試案

- 望ましい社会にむかって



- 「利用者を単なる享受者から情報の発信者に転換するために、そして資料をより深く使ってもらうために、専門職たる司書の実力を十分に発揮させるために」（福島2018）
- 「デジタルと物理の各資料を往還しつつ、かつデジタルを軸に資料の壁を乗り越え、ハイブリット化を目指すことを通じて、地域や団体の情報のハブとなることを指向」（福島2018）

4-2.いくつかの留保

- 公立図書館での実践例
  - 広場論とも接合しつつ実践の準備が周到に行われているのは県立長野図書館？（平賀研也2016）
  - 他の注目されている公立図書館の取組はデジタル展開が十分ではない状況

- 図書館の個性の発揮方法
  - サービス重視よりもコンテンツ重視への転換を
  - これもリソースの配分の課題となる

- 専門家集団／研究者として
  - 社会への影響力や政策への関与は
  - 構造に抗い、仕組みを決定できているか？
  - 他の専門集団と“連携／融合”できているか？
  - 社会的使命の確認
    - 評価基準の創出：施設の社会的使命を自ら決定する重要性
    - 「図書館員の倫理綱領」（日本図書館協会1980）の再検討？

参考文献

- 「アーカイブ立国宣言」編集委員会編2014『アーカイブ立国宣言』(ポット出版)
- 天野絵里子,井上奈智,江上敏哲,小村愛美,福島幸宏2018『アーカイブサミット 2017 in Kyoto 報告書』(アーカイブサミット組織委員会)
- 植村八潮・柳与志夫編2017『ポストデジタル時代の公共図書館』(勉誠出版)
- 梅棹忠夫1987『メディアとしての博物館』(平凡社)
- 小熊英二2019『日本社会のしくみ 雇用・教育・福祉の歴史社会学』(講談社現代新書)
- 古賀崇2017a「日本におけるデジタルアーカイブのゆくえを探る:国際動向を踏まえた「より深い利用」に向けての展望」『情報の科学と技術』67(2)
- 古賀崇2017b「「デジタル・アーカイブ」の多様化をめぐる動向 : 日本と海外の概念を比較して (研究展望)」『アート・ドキュメンテーション研究』24
- 国会図書館2009「文化・学術機関におけるデジタルアーカイブ等の運営に関する調査研究」(20191020認)
- 後藤真・橋本雄太編2019『歴史情報学の教科書』(文学通信)
- 嶋田学2019『図書館・まち育て・デモクラシー 瀬戸内市民図書館で考えたこと』(青弓社)
- 数藤雅彦編2019『権利処理と法の実務』(勉誠出版)
- 時実象一2015『デジタルアーカイブの最前線』(講談社ブルーバックス)
- 冨澤かな, 木村拓, 成田健太郎, 永井正勝, 中村覚, 福島幸宏2018「デジタルアーカイブの「裾野のモデル」を求めて」『情報の科学と技術』68(3)
- 長尾真1994『電子図書館』(岩波書店)(新装版は2010)
- 西川開2017「デジタルアーカイブ」の価値を測る:Europeanaにおける「インパクト評価」の現状」 https://www.dhii.jp/DHM/dhm75-2(20191020確認)
- 林直樹,齋藤晋編2010『撤退の農村計画』(学芸出版社)
- 平賀研也2016「これからの図書館のイメージ・ビジョン Library 3.0 明日をつくる多様な知のコモンズ(共有地)としての図書館を構想する(私論)」『社会教育』(2016年11月号)
- 福島幸宏2009「使いたおすアーカイブズへ」『全史料協 会報』84
- 福島幸宏2011「地域拠点の形成と意義」『デジタル文化資源の活用ー地域の記憶とアーカイブ』(勉誠出版)
- 福島幸宏2018「これからの図書館員像ー情報の専門家/地域の専門家として」『現代思想』46-18
- ポールフリー,ジョン、雪野あき訳2016『ネット時代の図書館戦略』(原書房)
- 堀井洋2019「“逐次公開”の考え方に基づいた学術資料調査・整理・公開に関する考察」『デジタルアーカイブ学会誌』3-2
- 増田寛也2014『地方消滅』(中公新書)
- 水島久光2018「ソーシャル・デザインとしてのデジタルアーカイブ」『手と足と眼と耳』(学文社)
- 柳与志夫編2017『入門 デジタルアーカイブ』(勉誠出版)
- 吉見俊哉2017「なぜ、デジタルアーカイブなのか? ―知識循環型社会の歴史意識」『デジタルアーカイブ学会誌』1-1

- 報告書「我が国におけるデジタルアーカイブ推進の方向性」(内閣府)http://www.kantei.go.jp/jp/singi/titeki2/digitalarchive_kyougikai/index.html(20191020確認)
- 「デジタルアーカイブの構築・共有・活用ガイドライン(内閣府)http://www.kantei.go.jp/jp/singi/titeki2/digitalarchive_kyougikai/index.html(20191020確認)